夢と志【学校通信】

平成 24 年 11 月 29 日

第 42 号

西中の風

～『信頼と笑顔』毎日1,500の思いやりあふれる学校生活 ～

伊丹市立西中学校長
豊田　實

道徳授業とは！

11月27日、伊丹市中学校道徳教育研究会（授業公開・研修）を本校で開催しました。日本道徳教育学会近畿支部長　行本美千子氏を講師に招聘し、主題を「道徳の授業づくりと演習」とし道徳教育に関する指導を高めるための示唆に富んだ講話でした。出席者は、市内全中学校道徳教育推進教員と本校の全職員です。研修内容の一部ですが、学校とご家庭との連携の一助とするため紹介します。

【道徳教育の要（かなめ）】

小学1年生から中学3年生まで児童生徒の成長発達段階に応じて道徳の内容が示されています。道徳教育はあらゆる生活の場（学校では、全ての教育活動）で行われるものです。多様な機会があることをふまえて、生徒の道徳性を補充・深化・統合するために道徳授業は「要（かなめ）」となるのです。

【道徳教材の扱い】

資料の読み込みは基本です。人に与えられる情報量を例えとすると、音声付き映像は、かなりの情報を与えられていることになります。映像を見たり音声を聞いたりすることに比べて、活字を目にし読むことは情報量が少ないが故に思考を強く働かせることになるのです。

【道徳性を高める本質】

自分の振り返りばかりに終始する「懺悔（ざんげ）道徳」を行うと、生徒は授業で身につけるべき道徳性の本質から遠ざかってしまいます。教科授業と道徳授業は異なることを端的にお話します。教科に関する学習は、知らないことから始まり、「教える」ことによって知識を獲得しますが、道徳は、既に知っていることを、「考えて」、生徒本人が自覚することが目的となります。
※決まりきった常識を問うことに流れる授業を行うと、生徒は明白で模範的な答えに縛られてしまいます。生徒が広く、深く、思考を巡らせることが難しくなっている授業が多く見受けられます（例:社会のルール、暴力、いじめ問題などを深めることなく羅列）。題材や授業手法を改善しなければなりません。

【教師と生徒は『思い』をやりとりする】

教師が生徒に発言を求めるときは、視線を合わせて問答してください。答えを求めることだけがねらいではなく、「“思い”をやりとり」することが大切なのです。

【自分自身との対話】

道徳は、生きていくためのものであり、自分自身との対話が重要です。教師も知識を教えることが主目的ではなく生徒と共に考える姿勢で授業に臨むことが培いたい道徳性の本質を深めることになるのです。

【中心発問で授業レベルが決まる】

読み物資料のキーワードを確かめ、発言（答え）させることのみが、道徳授業ではありません。考えを深める学習を目的とするべきです。教師がテーマや教材を十分に咀嚼（そしゃく）しておいて、生徒たちに投げかける「中心発問」でさまざまに答えさせ、すべてを受け入れて授業展開することが期待されるのです。生徒が、長く喋る、深く話すなど成長を実現させたいものです。

【授業後の感想文の扱い】

授業後の感想文は、生徒の評価をする材料ではなく教師の授業を評価するものと捉えるべきです。

2年1組公開授業の模様（11/27）

本校のめざす教師像

1　教育に対する信念と情熱を持ち、
　　未来にはばたく生徒を育てる教師
2　生徒個々の良さを認め、
　　生徒の心にふれる指導で尊敬される教師
3　自らの資質向上のため、
　　指導を振り返り改善を重ねる努力をする教師